

〈無量寿経〉における阿羅漢・声聞の変移

佐々木 大 悟

はじめに

最近の大乗仏教の起源問題に関して佐々木閑氏によって「それまで聖典として權威を持っていた阿含には書いてないような新しい教義が少しずつ現れ、少しずつ信奉者が増え、少しずつ權威をつけていったのであろう」¹⁾ という見解が出された。論者はこの見解に触発され、そして「もし、大乗仏教運動全般においてこの仮説が適応できるならば、大乗經典の一つである〈無量寿経〉²⁾においても、その変遷が確認できるはずである」と考えるようになった。

そのことを確認する方法として以下のことを考えた。

〈無量寿経〉の最古の訳である『大阿弥陀経』³⁾では、他の大乗經典にあまり見られない「菩薩阿羅漢」⁴⁾という特殊な表現が多く登場する。また、『大阿弥陀経』は内容的にも大乗經典でありながら、「阿羅漢」をおとしめておらず、逆に「阿羅漢」についても多く記述している。「阿羅漢」が思想的に必要不可欠な要素として一つの位置を占めている⁵⁾。

〈無量寿経〉が変化するときの特徴の一つに「菩薩思想の高揚」が挙げられるが、それは「菩薩」への言及が増加するだけでなく「阿羅漢（声聞）の勢力の減少」とい

1) 佐々木閑「部派仏教の概念に関するいささか奇妙な提言」『初期仏教からアビダルマへ』、平楽寺書店、2002年。

2) 〈無量寿経〉は『無量寿経』の諸異本のもとになった種々の原本を総称する経名を指す。藤田宏達『原始浄土思想の研究』、岩波書店、1970年、参照。

3) その他、本論では『大阿弥陀経』は『大阿』、『平等覚経』は『平等』、『無量寿経』は『寿経』、『無量寿如来会』は『如来会』、『莊嚴経』は『莊嚴』とそれぞれ省略することがある。

4) 後期無量寿経や梵本で「声聞」とある部分を支婁迦讖は「阿羅漢」を訳している。Paul Harrison, "Who Gets to Ride in the Great Vehicle? Self-Image and Identity among the Followers of Early Mahayana", *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, v.10 n.1 [1987], pp. 81-82.

5) それは初期大乗經典である『法鏡経』や『般舟三昧経』や『阿閼佉国経』と類似した形である。その原因として、經典成立時において菩薩思想を掲げる側の勢力がまだ小さかったことが予想できる。

う動きとも連動していることが考えられる。佐々木氏の仮説を演繹すれば、おそらくこの『大阿弥陀経』に象徴的にあらわれる「菩薩阿羅漢」という言葉に何らかの変化が起こってくると考えられる。例えば「阿羅漢」という言葉が徐々に減少していくだろうという見通しが立てられる。つまり「菩薩阿羅漢」という言葉に変更が加えられ、例えば単なる「菩薩」などの言葉にとって代わられることが予想される。私は『大阿弥陀経』と『平等覚経』の間で、ふとそのような変化の可能性を感じた。本論はその点を〈無量寿経〉全体の変遷を追って確認していくものである。

〈無量寿経〉内においてこの変化を確認する方法としては、その他にも内容的に「阿羅漢」が削除される部分、「菩薩」が発展する部分を指摘するという方法もあるが、今回はそれは行わずに「菩薩阿羅漢」という言葉の変遷だけに限定して考察を行う。

第一章 『大阿弥陀経』における「阿羅漢」

〈無量寿経〉における「阿羅漢」の変遷を見ていくための前提としてその最古の訳である『大阿弥陀経』における「阿羅漢」という語の分析を行う。『大阿弥陀経』では「阿羅漢」という語が登場する際に、「菩薩阿羅漢」と「阿羅漢」という二種類の語が出てくるが、この両者をそれぞれ分析する。二章で行う考察の前提作業である。

第一節 菩薩阿羅漢

まず「菩薩阿羅漢」という表現を分析する。『大阿弥陀経』の中で、主語として最も多く登場する表現は、この「菩薩阿羅漢」である。とくに是間（娑婆）の衆生全体を指す「諸天人民蜎飛蠕動之類」という言葉に対して、出家道場の世界である須摩題（極楽）の主語は基本的にこの「菩薩阿羅漢」になっている。菩薩阿羅漢という一まとまりの表現は、他の経典を見ても非常に稀である。ところが、『大阿弥陀経』では87回も出て、主要な主語になっている。

この「菩薩阿羅漢」という表現は、

仏語阿難。阿弥陀仏爲諸菩薩阿羅漢説経竟、諸天人民中有未得道者、即得道。未得須陀洹者、即得須陀洹、未得斯陀含者、即得斯陀含、未得阿那含者、即得阿那含、未得阿羅漢者、即得阿羅漢、未得阿惟越致菩薩者、即得阿惟越致菩薩。

(307b22)⁶⁾

とあるように、「菩薩」と「阿羅漢」という二種類の衆生を合わせて言った表現であることが分かる。この二種類の衆生を常に同時に主語にして語ろうという意識がこの『大阿弥陀経』では見られる。

この「菩薩阿羅漢」は

阿弥陀仏国諸菩薩阿羅漢衆比丘僧故如常一法，不異爲增多。(308a10)

と比丘僧であることが示されている（同様の記述は4度あらわれる）。

また、『大阿弥陀経』では、

諸無央數天人民及蜎飛蠕動之類諸來生我國者，悉皆令作菩薩阿羅漢，無央數，都勝諸仏国。(300c28)

とあるように、是間で「諸天人民蜎飛蠕動之類」であったものが、須摩題で「菩薩阿羅漢」になることが繰り返し説かれる。そして、この引文にもあるように、須摩題では、すべての衆生が「菩薩阿羅漢」であることが説かれる。また、須摩題において

復令他方面各千須弥山仏国中諸天人民蜎飛蠕動之類皆復使得入道，悉令作辟支仏阿羅漢，皆令坐禪一心，合其智慧爲一勇猛，共欲數阿弥陀仏国中諸菩薩阿羅漢知有幾千億萬人，皆無有能知數者。(309a4)

とあるように、「菩薩阿羅漢」は数えられないほど多いことが述べられている。須摩題での基本的衆生であるこの「菩薩阿羅漢」はその他にも様々に形容される。

其諸菩薩阿羅漢面目皆端正，淨潔絶好，悉同一色，無有偏醜惡者也。諸菩薩阿羅漢皆才猛點慧。(303c12)

とあるように、「面目端正」であり、「同一色」であり、また、

6) (307b22) は、『大正蔵』12巻，307中段，22行目のことを表している。以下も同様。ただし、『如来会』の引用に限り、『大正蔵』11巻のページ数である。また、句点や読点は筆者による。

諸菩薩阿羅漢悉皆洞視，徹聽，見知八方上下來現在之事，復無數天上天下人民及蜎飛蠕動之類心意所念善惡・口所欲言，皆知當何歲何劫。得度脫得人道，往生阿弥陀仏国，知當作菩薩阿羅漢。皆豫知之。(308b4)

とあるように天眼・天耳・他心通などの様々な神通力を持つとされる。その他にも，姪洩・瞋恚・愚痴がなく，たがいに敬愛すると述べられる⁷⁾。智慧があるため光明を具えているとも言及される⁸⁾。また，

諸菩薩阿羅漢所居舍宅皆復以七寶金、銀、水精、琉璃、珊瑚、虎珀、車渠、碼瑙化生，轉共相成。(304a5)

阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢講堂、精舍、所居處舍宅中内外浴池上皆有七寶樹。(305a4)

などとあるように，「菩薩阿羅漢」は，須摩題の基本的な衆生であるため，舍宅や七宝樹などの環境世界と絡めて言及されることも多い。

また，出家修行者であることから

諸菩薩阿羅漢中有誦經者，其音如三百鐘聲。中有說經者，如疾風暴雨時。(307c2)

と経を暗誦することが描かれたり，

仏言：“阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢欲食時，即自然七寶机、劫波育闍、疊以為座，仏及菩薩皆坐前。”(307a4)

と，その食事や衣のことも言及される。また，

諸菩薩皆大歡喜，俱於虛空中，大共作衆音自然伎楽，樂諸仏及諸菩薩阿羅漢。當此之時快樂不可言。(306c18)

7) 『大正藏』12,303c.「皆相敬愛，无相嫉憎者。皆以長幼、上下、先後，言之，以義，如禮。轉相敬事，如兄如弟，以仁履義。不妄動作，言語如誠。轉相教，令不相違戾，轉相承受。皆心淨潔，无所貪慕，終无瞋怒、淫洩之心、愚癡之態。无有邪心念婦女意。」

8) 『大正藏』12,308b.「諸菩薩阿羅漢頂中皆悉自有光明所照有大小。」

諸天人皆復大作伎楽，樂阿弥陀仏及諸菩薩阿羅漢。(306c7)

とあるように、仏と一緒に諸菩薩や諸天人に供養されることが繰り返し述べられる。

このような性質が『大阿弥陀經』の「菩薩阿羅漢」という言葉に帰せられている。

第二節 阿羅漢

次に、「菩薩阿羅漢」という「菩薩」と併記された書き方ではなく、単独で「阿羅漢」もしくは「羅漢」と表記されるものを押さえていく。

『大阿弥陀經』では śrāvaka という語に「阿羅漢」という言葉を使用しているので、その結果、「阿羅漢」という言葉を二種類に分けて考えなければならない。声聞道の階梯の最高位としての「阿羅漢」と śrāvaka の訳語として声聞を表す「阿羅漢」とである。

諸可教授弟子者，展轉復相教授，轉相度脱，至令得須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支仏道。轉相度脱，皆得泥 之道悉如是。(308c15)

という一文があるが、ここに直接「阿羅漢」と出るのは声聞道の階梯の最高位としての阿羅漢である。そして、ここでは「弟子」という言葉が、これらをまとめて使われているけれども、それと同じやり方でまとめとして声聞道の全体を指して「阿羅漢」という言葉が使われる場合がある。

若問仏者勝於供養一天下阿羅漢辟支仏，布施諸天人民及蜎飛蠕動之類累劫百千億萬倍也。(300b8)

とあるように、常に声聞道を代表するときに「阿羅漢」という表記を前面に出している。ここに、例えば「須陀洹辟支仏」という形では出てこない。このまとめとしての阿羅漢は、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を含み、「究極的には阿羅漢果を求める人全体」という程度の意味であることが予測できる。

阿羅漢の特徴としては、まず上の引用にあるように、供養される側として描かれていることが指摘できる。これは一般に「応供」(arhat) と呼ばれる阿羅漢の定義からしてもふさわしい。また、

仏説是経時、即萬二千億諸天人民皆得天眼徹視、悉一心皆爲菩薩道。即二百億諸天人民皆得阿那含道、即八百沙門皆得阿羅漢道。(317c16)

とあるように、他の衆生（例えば菩薩）に比べて声聞道の階梯の最高位としての「阿羅漢」は相対的に数が少ないものとされている。また、声聞道の階梯の中では、限定された人しかねない上位の価値が与えられている。それに比べて、須摩題においては

仏言：“阿弥陀仏国諸阿羅漢般泥洹去者無央數、其在者新得道者亦無央數、都不爲増減也。”(308a2)

と、その般涅槃する「阿羅漢」の数が無数であるとされている。

菩薩と光明を比べた場合は、

其諸菩薩頂中光明各照千億萬里。諸阿羅漢頂中光明各照七丈。(308b18)

と、光明は「七丈」と「菩薩」の光明に比べ少ないものとされている。また

佛言：“阿彌陀佛國諸阿羅漢中、雖有般泥洹去者、大海減一滯水爾。不能令在諸阿羅漢爲減知少也。”(307c24)

とあるように、「阿羅漢」は一仏国土内で最終的に般泥洹（涅槃）する存在として描かれる。また「阿羅漢」は是間にも須摩題にも存在するが、「往生」などのようにその二仏国土間を移動するような言及は一度もない。

『大阿弥陀経』では「菩薩阿羅漢」そして「阿羅漢」という言葉はこのような性格を持ち、随所に登場する。制作者は「阿羅漢」を貶めることはなく、ごく自然に坦々と「阿羅漢」の生活や様子を描いている。「菩薩」に対する言及とほぼ同等に「阿羅漢」に対しても言及しようという意識が窺える⁹⁾。このような状況は、時代が下り、〈無量寿経〉が変遷していくにつれて徐々に変化していく。以下の節では、このうち「菩薩阿羅漢」という表現に着目し、その表現の変化を見ていく。

9) この点に関しては拙稿『『大阿弥陀経』における阿羅漢の般涅槃と菩薩の往生』『印度学仏教学研究』54(2)、2006年3月を参照せよ。

第二章 〈無量寿經〉における「阿羅漢」の変移

第一節 『平等覚經』における「阿羅漢」

『平等覚經』でも基本的には『大阿弥陀經』と同じように「菩薩阿羅漢」という表現を継承している。ところが『大阿弥陀經』では一貫して使用されていたこの表現が、『平等覚經』願文において崩れ、変化を見せる（願文以外の箇所は、『大阿弥陀經』にほぼ一致する）。以下、大きく二つに分類して記述する。

第一項 「菩薩阿羅漢」→「菩薩」

まず、「飲食在前の願」を見ると、『大阿弥陀經』では

第十四願。使某作佛時，令我國中諸菩薩阿羅漢欲飯時，即皆自然七寶鉢中有自然百味飯食在前，食已自然去。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。(301c29)

第十四願：もし私が仏になったら、私の国の菩薩や阿羅漢たちがみな食事をしようとするとき、自然に生じた七宝の鉢の中に自然に生じた様々な味の食べ物が前に現われ、食べ終われば、すっと消えますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しないならば、決して仏にはなりません¹⁰⁾。

と、「諸菩薩阿羅漢」となっているものが、『平等覚經』では

二十三。我作佛時，我國諸菩薩欲飯時，則七寶鉢中生自然百味飲食在前，食已鉢皆自然去。不爾者我不作佛。(281c18)

と、単に「諸菩薩」となっていることが確認できる。主語以外の記述はほぼ同じであるのに、主語が「諸菩薩阿羅漢」から「諸菩薩」に変化している。

全く同様の变化として、「説一切智の願」があげられる。『大阿弥陀經』で

第十六願。使某作佛時，令我國中諸菩薩阿羅漢語者如三百鍾聲，説經行道皆如佛。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。(302a7)

10) 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注（一）』『仏教大学総合研究所紀要』第六号，1999年3月，pp. 146-147。

第十六願：もし私が仏になったら、私の国の菩薩や阿羅漢たちが語るとき、（その声が）三百の鐘の音のようであり、仏とおなじように教えを説き、仏道を行いますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になるりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません¹¹⁾。

と「諸菩薩阿羅漢」となっていたものが、『平等覚経』では

二十四。我作佛時，我國諸菩薩説經行道不如佛者，我不作佛。(281c21)

と、やはり「諸菩薩」になっている。「諸菩薩阿羅漢」→「諸菩薩」と変化している。これらの結果を表にすると表1のようになる（括弧内の数字は願文の順番を表す）。

表1

	説一切智の願	飲食在前の願
大阿弥陀経 平等覚経	諸菩薩阿羅漢 (14) 諸菩薩 (23)	諸菩薩阿羅漢 (16) 諸菩薩 (24)

第二項 「菩薩阿羅漢」→「人民」

また、「菩薩阿羅漢」が「人民」となる変化が見られる。「宿命通の願」は『大阿弥陀経』では、

第二十二願。使某作佛時，令我國中諸菩薩阿羅漢皆智慧勇猛，自知前世億萬劫時宿命所作善惡，劫知無極，皆洞視徹知十方去來現在之事。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。(302b1)

第二十二願：もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢はみな智慧あり、勇敢で、彼らが億万劫の過去世以来、過去の生存においてなした善惡の行為を知っており、将来のことも果てしなく知っており、みな、十方の過去・未来・現在のことを見通し、はっきり知りますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりまよう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません¹²⁾。

11) 前掲論文，p. 147。

となっているところが、『平等覚經』では

五。我作佛時，人民有來生我國者，皆自推所從來生本末，所從來十億劫宿命，不悉知念所從來生，我不作佛。(281a24)

となっている。同様の変化が「人壽無量の願」でも窺うことができ、『大阿弥陀經』で

第二十一願。使某作佛時，令我國中諸菩薩阿羅漢壽命无央數劫。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。(302a28)

第二十一願。私が仏になったとき，私の国中の諸菩薩・阿羅漢の寿命が無数劫になりますように。この願が成就すれば（私は）仏になるでしょう，この願が成就しないならば，決して仏にはならないでしょう¹³⁾。

となっている箇所が、『平等覚經』では、

十五。我作佛時，人民有來生我國者，除我國中人民所願，餘人民壽命無有能計者，不爾者我不作佛。(281b22)

となっている。これも「菩薩阿羅漢」→「人民」となっている。その他，もう一箇所でも同様の変化が見られる（悉皆金色の願・無有好醜の願¹⁴⁾）。以下，表2にする。

12) 前掲論文，p. 149。

13) 前掲論文，p. 148。

14) 『大阿弥陀經』で「第九願。使某作佛時，令我國中諸菩薩阿羅漢面目皆端正，淨潔姝好，悉同一色，都一種類皆如第六天人。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。」(301c)，「第二十二願。使某作佛時，令我國中諸菩薩阿羅漢皆智慧勇猛，自知前世億万劫時宿命所作善惡，却知无極皆洞視徹，知十方去來現在之事。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。」(302b) が，それぞれ『平等覚經』では，「三。我作佛時，人民有來生我國者，不一色類金色者，我不作佛」(281a)，「五。我作佛時，人民有來生我國者，皆自推所從來生本末所從來十億劫宿命，不悉知念所從來生，我不作佛。」(281a) となっている。

表 2

	金色・無有好醜	人壽無量	宿命通
大阿 平等	諸菩薩阿羅漢 (9) 人民 (3・4)	諸菩薩阿羅漢 (21) 人民 (15)	諸菩薩阿羅漢 (22) 人民 (5)

ただ、一点やや今回の私の想定に反する変化が見られる。「声聞無数の願」では『大阿弥陀経』で数えられる対象が「菩薩阿羅漢」であったものが、『平等覚経』で「諸弟子」、『無量寿経』で「國中声聞」という変化をした¹⁵⁾。この変化では、「菩薩」のほうが消去されている。

いずれにせよ、結果的に『平等覚経』の二十四願には「菩薩阿羅漢」という語が消えてなくなる。この「菩薩阿羅漢」からの様々な主語への拡散は、詳細に理由づけることはできないが、「菩薩阿羅漢」→「菩薩」であれ、「菩薩阿羅漢」→「人民」であれ、この一点の例外を除き、変化したときに、「阿羅漢」の語が隠れるという結果をもたらしている。

第二節 『無量寿経』における「声聞」（「阿羅漢」）

『無量寿経』以降の漢訳では「阿羅漢」のことを一貫して「声聞」と表現している。そのため、ここからは、これまで「阿羅漢」として注目していた語を「声聞」に置き換えて眺めていく。『無量寿経』では「菩薩声聞（声聞菩薩）」という言葉が20回登場し、これまでの『大阿弥陀経』・『平等覚経』の「菩薩阿羅漢」という表現を継承している部分も存在するが、そのうちの「声聞」が消える箇所もいくつか窺える。それを追って確認していく。

「菩薩の徳」を長々と述べる部分では、『大阿弥陀経』では、

佛言：「阿彌陀佛國諸菩薩阿羅漢衆等大聚會，自然都集。拘心制意，端正正行，遊戲洞達，俱相隨飛行，麟輩出入，供養無極。歡心喜樂，共觀經行道，和好久習，才猛智慧。志若虛空，精進求願，心終不復中徊，意終不復轉，終無有懈極

15) 『大阿弥陀経』で「第二十願者，使某作佛時，令八方上下各千億佛國中諸天人民蜎飛蠕動之類皆令作辟支佛阿羅漢，皆坐禪一心，共欲計數我國中諸菩薩阿羅漢知有幾千億万人，皆令无有能知數者。得是願乃作佛，不得是願終不作佛。」(302a) とあるのが、『平等覚経』で「十二我作佛時。我國諸弟子。令八方上下各千億佛國中。諸天人民蠕動之類。作緣一覺大弟子。皆禪一心。共數我國中諸弟子。住至百億劫無能數者。不爾者我不作佛。」(281b) となり、『無量寿経』では「設我得佛，國中聲聞有能計量，乃至三千大千世界衆生緣覺於百千劫悉共計校知其數者，不取正覺。」(268a) となっている。

時。雖求道外若遲緩，内獨急疾，容容虚空，適得其中。中表相應，自然嚴整。撿歛端直。身心清潔。無有愛欲。無所適貪。”(311c1)

仏は仰った。「阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢たちが大集会をするのに、みな自ずと集まる。(彼らは) ころを制しており、行いもきちんとしており、自由自在に遊び楽しみ、みな連れだって飛んできて、大挙して出入りし、見通し、(互いに?) 最高に供養し、喜び楽しむ。みな一緒に教えを觀想し(?), 仏道を行い、仲睦まじく、ずっと親しくしていて(?), 才能が優れ、智慧あり、空のように虚心で(ひたすら) 精進して願(の成就)をめざし、途中で志を翻すことは決してなく、意志が揺らぐことは決してなく、疲れることを全く知らない。その時、さとりを求めているとはいえ、外見はゆったりしている。内側は逆にじりじりしている。虚空(のように) 悠然として(?), ちょうどほどよく、外見と心の中が呼応している。そのままで(外見は) きちんとしていて、きりりと引き締まっていて、端正。身も心も清らかで、欲望がなく、好き嫌いがなく、あらゆる悪も汚れない¹⁶⁾。

と「菩薩阿羅漢」の性質として記述されているのに対し(『平等覺経』もほぼ同じ)、
『無量寿経』では

佛告阿難，生彼佛國諸菩薩等所可講說常宣正法，隨順智慧，無違無失。於其國土所有萬物，無我所心，無染著心。去來進止情無所係，隨意自在，無所適莫。(273c23)

と「諸菩薩」の性質として説明している。すなわち、この章段全体が「菩薩の徳」へと変わってしまっている。

また、「光明の無量」を説く箇所『大阿弥陀経』で

若其然後作佛者，亦當復爲八方上下諸无央數佛辟支佛菩薩阿羅漢所稱譽光明如是也。(303a25)

もし、そののち仏になれば、(その仏の) 光明も八方上下の無数の仏たち、辟支仏、菩薩、阿羅漢たちに、(阿弥陀仏の光明と) 同じように称えられるであろう¹⁷⁾。

16) 辛嶋静志『『大阿弥陀経』訳注(七)』『仏教大学総合研究所紀要』第13号、2006年3月、pp. 4-5。

となっており、『平等覚経』では

若其然後作佛者，亦當復爲八方上下無央數辟支佛菩薩阿羅漢所稱譽光明。
(282c9)

となっているものが（「仏」が削除されているが、その他は同じ）、『無量寿経』では

至其然後得佛道時，普爲十方諸佛菩薩歎其光明亦如今也。(270b12)

となっており、「菩薩」だけになり、「阿羅漢」や「辟支仏」のことが削られている（表3）。

表 3

	菩薩の徳	光明の無量
大阿弥陀経	諸菩薩阿羅漢	辟支仏菩薩阿羅漢
平等覚経	諸菩薩阿羅漢	辟支仏菩薩阿羅漢
無量寿経	諸菩薩等	菩薩

ここで確認できた二例は「（辟支仏）菩薩阿羅漢」が、「菩薩」へと変更されて述べられる例であった。『平等覚経』では願文においてこのような変化が確認できたが、今回の『無量寿経』では願文以外の箇所において確認できた。

第三節 『如来会』・『莊嚴経』・サンスクリット本・チベット本における「声聞」

『如来会』・『莊嚴経』・サンスクリット本・チベット本の変化は一度に眺める（『無量寿経』を起点として、その展開を見ていく）。ここでは原典とされるサンスクリット本も展開したものとして捉える（完本として現存しているものは時代が下るため）。藤田宏達氏¹⁸⁾ はこれらの順序を

『大経』→『如来会』→サンスクリット本・チベット本
としており（『莊嚴経』は異系統）、香川孝雄氏¹⁹⁾ は

17) 辛嶋静志『大阿弥陀経』訳注（2）『仏教大学総合研究所紀要』第7号，2000年3月，p. 98。

18) 藤田宏達・桜部建『浄土仏教の思想Ⅰ，無量寿経・阿弥陀経』，講談社，1994年，p. 43。

19) 香川孝雄『無量寿経の諸異本対照研究』，永田文昌堂，1981年，p. 51。

寿經→如来会→S（サンスクリット）・T（チベット）

→莊嚴經

としている。今回、私が経典を引用する場合は、便宜上『如来会』・『莊嚴經』・サンスクリット本・チベット本の順で引用することとする。ここからは『無量寿經』を起点として、その展開を眺めていく。

本節においても、でも『平等覚經』のときと同様に、「菩薩声聞」→「菩薩」と「菩薩声聞」→「衆生」との二つに分けて見ていく。

第一項 「菩薩声聞」→「菩薩」

『無量寿經』の後半に「阿難が阿弥陀仏を見る」箇所があるが、そこでは以下のようになっている。

白言世尊：“願見彼仏。安樂国土及諸菩薩声聞大衆。”（278a1）

世尊に申し上げた。“どうそ無量寿仏とその国土，そしてそこにおられる菩薩や声聞の方々を，まのあたりに拝ませてください。”

この箇所は「諸菩薩声聞」という表現になっている。それが、『如来会』になると、

白佛言世尊：“我今欲見極樂世界無量壽如來，并供養奉事無量百千億那由他佛及菩薩衆種諸善根。”（99c12）

と、「菩薩衆」だけに限定されるようになっている。同様に、『莊嚴經』でも

世尊告言：“其中生者菩薩摩訶薩已曾親近無量諸佛植衆德本。汝欲生彼，應當一心歸依瞻仰。”（325a15）

と、「菩薩摩訶薩」になっており、「声聞」が削除されている。さらにサンスクリットでも

icchāmy ahaṃ bhagavaṃs tam amitābham amitaprabham amitāyusaṃ tathāgatam arhantaṃ samyaksaṃbuddhaṃ draṣṭuṃ, tāṃś ca bodhisattvān mahāsattvān bahubuddhakoṭīnayutaśatasahasrāvaropitakuśalamūlān.²⁰⁾

世尊よ、わたくしは、かの無量の光たるアミターバ、アミタ・プラバ、アミターユス如来・応供・正等覚者と、千万・百万・十万の多くの仏たちのもとで善根を植えたかれら菩薩・大士を見たいのであります²¹⁾。

と、「bodhisattvān mahāsattvān (菩薩・大士)」だけになっている。チベットも同様に、

bcom ldan ḥdas bdag de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag bar rdzogs pa'i sangs rgyas 'od dpag med de dang tshe dpag med de dang byang chub sems dpa' sems dpa' chen po sangs rgyas bye ba khrag khrig brgya stong mang pa la dge ba'i rtsa ba bskrun pa de dag la 'tshal lo²²⁾

世尊よ、私はかの無量光・無量寿如来・応供・正等覚者と俱胝千万百万十万ほどの多くの仏に善根を植えるそれらの菩薩・摩訶薩を見たいです。

と、「byang chub sems dpa' sems dpa' chen po (菩薩・摩訶薩)」だけになっている。

まとめると、『無量寿経』では、「菩薩声聞」となっていたものが、それ以降のものになるとすべて「菩薩」だけになる、というように変更が加えられていることが確認できる。

そこから少し下り、「胎化段」になると類似の変化がもう一つ見られる。詳しくは省略するが、『無量寿経』で「菩薩諸声聞衆」(278b)とあり、『如来会』で「菩薩及声聞衆」とあるものが、サンスクリット本では「bodhisattva (菩薩)」となり、チベット本では「byang chub sems dpa' (菩薩)」と変化している²³⁾。サンスクリット本・チベット本以降になって変化している。

また、「三輩段」が終わり「東方(十方)の菩薩が供養しに来る」部分では箇所では『無量寿経』では

東方恒沙佛國無量無數諸菩薩衆，皆悉往詣無量壽佛所，恭敬供養及諸菩薩聲聞大衆，聽受經法宣布道化。(272c13)

東方のガンジス川の砂の数ほどの国々の数え切れない菩薩と声聞の大衆は、みな悉く無量寿仏のもとに行き、菩薩阿羅漢たちの大衆をもまた敬い供養し、そして

20) 藤田宏達『梵本無量寿経写本ローマ字集成』，山喜房仏書林，1996年，pp. 394-395。

21) 藤田宏達『梵本和訳無量寿経・阿弥陀経』法蔵館，1975年，p. 135。

22) The Tog Palace manuscript of the Tibetan Kanjur, 109 Vols, IASWR, USA, p. 811.l. 7-p. 812.l. 2.

23) この箇所の『莊嚴経』は対応が不明確である。

教えを聴き人びと教えを広めるのである。

となっている箇所が、『如来会』では

佛告阿難：“東方如恒河沙界，一一界中有如恒沙菩薩爲欲瞻禮供養無量壽佛及諸聖衆，來詣佛所。”（98a20）

と「諸聖衆」という珍しい単語を使用している。この箇所の変化は『莊嚴経』では判別がつかないけれども、サンスクリット本では

tasmin khalu punar ānanda buddhakṣetre daśabhyo digbhyo ekaikasyām diśi gaṅgānadīvalukopamā bodhisattvās tam amitābhaṃ tathāgatam upasaṃkrāṃanti darśanāya vandanāya paryupāsanaṃ paripraśnikaraṇāya taṃ ca bodhisattvagaṇaṃ tāṃś ca buddhakṣetraguṇālaṃkāravayūha- saṃpadviśeṣān draṣṭum²⁴⁾

また、実に、アーナンダよ、十方の各々の方角にあるガンジス河の砂のごとき菩薩たちは、かのアミターバ如来にまみえ、礼拝し、仕え、問いをなすために、またかの菩薩の集団と、これらの仏国土の特別な功德の嚴飾と莊嚴の成就を見るために、かの仏国土に赴くのである²⁵⁾。

と意味は少し変化しているが、「bodhisattvagaṇaṃ（菩薩衆）」だけになっている。チベット本でも同様に

kun dga' bo phyogs bcu'i phyogs re re nas kyang byang chub sems dpa' gangga'a'i klung gi bye ma snyed dag de bzhin gshegs pa 'od dpag me de la blta ba dang phyag bya ba dang bsnyen bkyur bya ba dang yongs su dri ba bya ba dang byang chub sems dpa'i tshogs de dang sangs rgyas kyi zhing gi yon tan gyi rgyan bkod pa phun sum tshogs pa'i khyad par de dag blta ba'i phyir sangs rgyas gyi zhing der 'dong ngo²⁶⁾

阿難よ、十方世界のそれぞれの方向から、またガンジス川の砂ほどの菩薩たちが、かの無量光如来を見、礼拝し、奉事し、尋ねるために、また、かの菩薩衆と

24) 藤田宏達『梵本無量寿経写本ローマ字集成』、山喜房仏書林、1996年、pp. 317-318。

25) 藤田宏達『梵本和訳無量寿経・阿弥陀経』法蔵館、1975年、p. 110。

26) The Tog Palace manuscript of the Tibetan Kanjur, 109 Vols, IASWR, USA, p. 796.1. 1-3.

仏国土の功德莊嚴が完全特勝であることを見るために、その仏国土に行くのである。

と、「byang chub sems dpa'i tshogs（菩薩衆）」となっている。

これらを表にすれば、表4のようになる。

表4

	阿難の見仏	胎化段	十方の菩薩
無量寿經 如来会 莊嚴經 梵本	諸菩薩声聞 菩薩 菩薩（摩訶薩） bodhisattva-mahāsattva 菩薩（大士）	諸菩薩声聞衆 菩薩及声聞衆 bodhisattva 菩薩	諸菩薩声聞大衆 諸聖衆 bodhisattvagaṇa 菩薩衆
藏本	byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 菩薩（摩訶薩）	byang chub sems dpa' 菩薩	byang chub sems dpa'i tshogs 菩薩衆

『如来会』の段階、もしくは梵本・藏本の段階から「菩薩阿羅漢」が「菩薩」に変更されていることが読み取れる。

これらはいずれも、目的語として登場しており、主語の変化ではない。そのため、この変化によって文章全体の意味が大きく変わることはない。しかし、そういう微細な箇所に変更が施されたところによって、かえって変動の圧力が大きかったことを窺い知ることができる。

第二項 「菩薩声聞」→「衆生」

次に「菩薩声聞」が「衆生」へと変化していく例を見る。

「極楽の池で沐浴する」箇所では、『無量寿經』が

彼諸菩薩及聲聞衆若入寶池，意欲令水沒足，水即沒足。(271b9)

もし、その国の菩薩や声聞たちが池に入り、足まで浸したいと思えば、水はすぐに足まで浸す。

と「菩薩阿羅漢」と表現していたものを、『莊嚴經』が

若彼衆生過此水時，要至足者，要至膝者，乃至要至頂者，或要冷者温者，急流者

慢流者，其水一一隨衆生意令受快樂。(322c13)

と「衆生」と表現しており（『如来会』は相当箇所が存在しない）、サンスクリット本も

tatra ye sattvās teṣu nadītīreṣv ākāṃkṣanti divyām nirāmiṣām ratikrīḍām cānubhavitum tesām tatra nadiṣv avatīrṇānām ākāṃkṣatām gulphamātram vāri saṃtiṣṭhate²⁷⁾

かしこにいる生ける者たちが、これらの河岸で、天の汚れのない快樂の戯れに耽りたいと欲し、かれらがその河に入るならば、欲するままに、水は足首の深さになる²⁸⁾。

と「sattvā（衆生）」と表現しており、チベットもまた

de na sems can kang dag chu klung gi ‘gram de dag tu zang zing med pa’i lha’i dga’ ba dang rtse ba myong par ‘dod pa de dag chu klung de dag tu ‘jug pa’i thse ‘dod na chung long bu nub tsam du gnas so²⁹⁾

そこにいる衆生たちは、それらの川岸において、欲望を離れた神の歓喜と遊戯を味わうことを願い、彼らがそれらの川に入る時、願いどおりに、水が足首を沈める程になる。

と「sems can（衆生）」と表現していることが確認できる。

その他、「容色の比較」の箇所では、『無量寿経』で

設第六天王比無量壽佛國菩薩聲聞光顏容色不相及逮百千萬億不可計倍。(272a3)

と「菩薩聲聞」となっているものが『如来会』では

阿難應知，彼國有情猶如他化自在天王。(97b18)

27) 藤田宏達『梵本無量寿経写本ローマ字集成』，山喜房仏書林，1996年，pp. 254-255。

28) 藤田宏達『梵本和訳無量寿経・阿弥陀経』法蔵館，1975年，p. 97。

29) The Tog Palace manuscript of the Tibetan Kanjur, 109 Vols, IASWR, USA, p. 783.l. 2-5.

とあるように「有情」に表現される例が見られる。また、サンスクリット本では

tatrānanda yathā devāḥ paranirmitavaśavartina evaṃ sukhāvatyāṃ lokadhātau
manuṣyā draṣṭavyāḥ³⁰⁾

アーナンダよ、かしの極楽世界における人々は、このようにパラニルミタ・
ヴァシャヴァルティン天の神々のごとくであると見るべきである³¹⁾。

と、「manuṣyā (人々)」となり、チベット本でも

kun dga' bo de la gzhan 'phrul dpang byed kyi lha rnam ci 'dra ba de 'dra bar bde ba
can gyi 'jig rten gyi kham s kyi mi rnam blta bar bya'o³²⁾

阿難よ、そこでは他化自在天の神々のように、そのように極楽世界の人々を見る
べきである。

とあるように「mi rnam (人々)」になっている。まとめると表5になる。

表5

	浴池	容色の比較
無量寿経	諸菩薩及声聞衆	菩薩声聞
如来会		有情
莊嚴経	衆生	
梵本	sattva (衆生)	manuṣya (人々)
藏本	sems can (衆生)	mi rnam (人々)

「菩薩声聞」から「衆生」「有情」「人々」などの言葉に変換されている。その他に
「菩薩」が「人民」に変更されるなどの変化は多々あるが、今回は「菩薩声聞（阿羅
漢）」からの変化だけに限定して考察した。

30) 藤田宏達『梵本無量寿経写本ローマ字集成』, 山喜房仏書林, 1996年, pp.283-284。

31) 藤田宏達『梵本和訳無量寿経・阿弥陀経』, 法蔵館, 1975年, p. 103。

32) The Tog Palace manuscript of the Tibetan Kanjur, 109 Vols, IASWR, USA, p. 789.l. 1-3.

小結

以上、『大阿弥陀経』から梵本・蔵本にわたるまでの展開を見てきた。『大阿弥陀経』の伝統を受けて「菩薩阿羅漢（声聞）」という表現が残存するところも見受けられるけれども、時代が下るにつれ、それらが徐々に「菩薩」もしくは「衆生」という表現へと変更されていく様子が確認できた。反対に、「菩薩」や「衆生」とあったものが「菩薩声聞」や「声聞」と書き換えられることは見られなかった³³⁾。(図1)

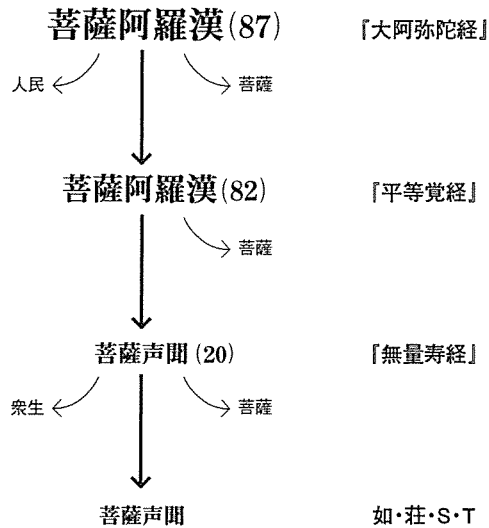


図1

第三章 数による調査

ここで、これまでの変化の確認とは視点を換え、それぞれの経典の中において何回「阿羅漢」という用語が使用されたかを見てみる。これまで確認してきた変化を数値上で確かめることができる。調査した結果を表にすれば、表6のようになる。

33) 前述したとおり、「声聞無数の願」は『大阿弥陀経』が「菩薩阿羅漢」と表現しているものを、『平等覚経』は「諸弟子」、『無量寿経』は「国中声聞」と表現している変化が一点だけある。

表6 〈無量寿経〉における「菩薩阿羅漢（声聞）」「阿羅漢（声聞）」の使用回数

	大阿	平等	寿経	如来会	(莊嚴)	梵本	藏本
菩薩阿羅漢（声聞）	87	82	20	11	(9)	5	3
阿羅漢（声聞）	20	22	7	8	(15 ³⁴⁾)	14 ³⁵⁾	17 ³⁶⁾

最初 87 回も登場した「菩薩阿羅漢」という表現は徐々にその数を減らし、ついには一けた程度しか使用されなくなる。また、単独で使用される「阿羅漢（声聞）」という語も、やや減少していることが分かる。

この表を菩薩の増減と比較すると、その違いが一層際立つため、その表も表7に示した。

表7 〈無量寿経〉における「菩薩阿羅漢」「菩薩³⁷⁾」の使用回数

	大阿	平等	寿経	如来会	(莊嚴)	梵本	藏本
菩薩阿羅漢（声聞）	87	82	20	11	(9)	5	3
菩薩	86	130	89	101	(55)	87	79

数の変化だけで単純に判断することには、危険をともなうが、この表によれば、先ほどの「阿羅漢」の傾向に対し、「菩薩」と記される回数はあまり減っていないことがわかる。

すると、例えば『如来会』をそれ自体で眺めるならば、「声聞」が8回に対して、「菩薩」は101回言及されることになっており、そこではいつの間にか〈無量寿経〉が「声聞」についてほとんど言及していない形になってしまっている。そこで例えば「国中人天」「有情」という人々を総括するような言葉が使用されても、実際にはそこから「声聞（阿羅漢）」のことをなかなか想起できなくなっている。そこではほぼ菩薩集団だけで成り立つバージョンの〈無量寿経〉が出来上がっている。

また、「衆生」という語の変遷も追ってみたところ、表8のようになった。

34) 『莊嚴経』では阿羅漢1回、声聞が14回で、あわせて15回使用されている。

35) サンスクリット本では、arhat が1回、śrāvaka が13回使用されている。

36) チベット本では dgra bcom pa（阿羅漢）が2回、ñan thos（声聞）が15回使用されている。

37) 「法藏菩薩」「弥勒菩薩」「観音菩薩」などの固有名詞は除くことにした。

表8 〈無量寿経〉における「菩薩阿羅漢」「衆生³⁸⁾」の使用回数

	大阿	平等	寿経	如来会	(莊嚴)	梵本	蔵本
菩薩阿羅漢 (声聞)	87	82	20	11	(9)	5	3
衆生	77	92	99	92	(81)	104	95

これらの表から、数値上でも、「菩薩阿羅漢」という表現が衰退し、主に「菩薩」「衆生」といった語にとって代わられた様子がうかがえる。(図2)

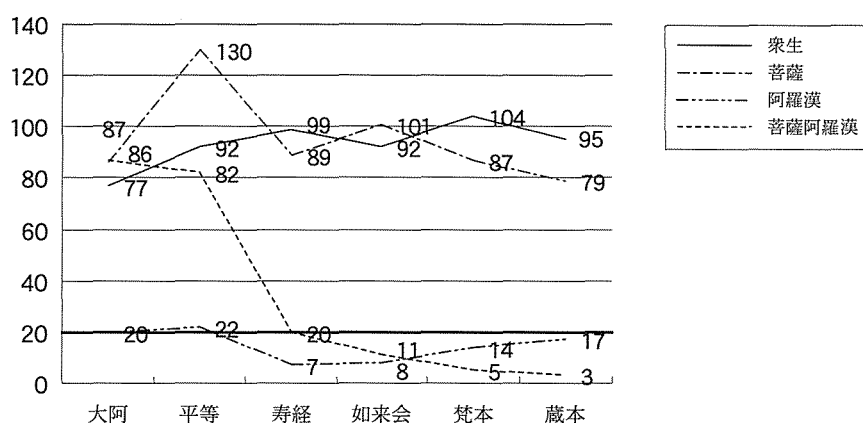


図2

結 語

本論文では、〈無量寿経〉において菩薩思想が発展しているということを「阿羅漢」という言葉が減少しているという、いわばその「裏面からの考察」によって確認した³⁹⁾。本論文では、最古の訳である『大阿弥陀経』に「菩薩阿羅漢」という用語が使用されているというその特殊かつ幸運な状況を利用した。その「菩薩阿羅漢」という言葉が、時代が下るにつれて減少し、徐々に「菩薩」や「衆生」などの言葉へととって代わられていった様子が確認できた。(様々な表現があるが、今回はその現象

38) 何を「衆生」に対応する言葉として考察するかで数字が大きく変わるため、難航した。「衆生」「有情」「諸天人民」「諸天人民及 飛蠕動之類」「人民」「世人」「世間」「人天」「sattvā」「manusya」「sems can」「mi rnams」などを「衆生」に対応する言葉として換算した。

39) 今回の確認の裏にある「菩薩思想の高揚」については、池本重臣『大無量寿経の教理史的研究』、永田文昌堂、1958年、pp. 232-243。など先学によって指摘されている。

に限定して考察した。) その変化の方向や単語の増加・減少の様子は佐々木氏の仮説と類似した方向性を持っている。

〈無量寿経〉を伝持したグループにおいては、もともと「菩薩」と「阿羅漢」は、「菩薩阿羅漢」という言葉の存在とともにほぼ同じ程度の割合で記述されていたが⁴⁰⁾、時代が下るにつれて、少しずつ「阿羅漢」への記述が消され、少しずつ「菩薩」が中心的位置を占めるようになっていったとすることができるだろう。

40) 「菩薩の諸仏供養」の箇所において単純な繰り返しの文章が見られ、そこで「菩薩」の語が繰り返されるため「菩薩」という語の数は、「阿羅漢」に対して全体的に多くなっている。